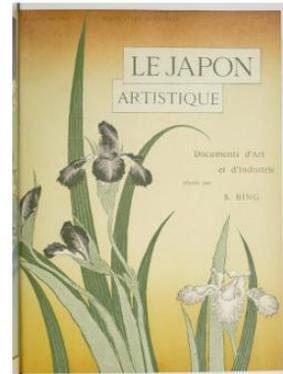


78 美術商・林忠正とジャポニザン（2021年9月9日）

前回、19世紀後半にパリで活躍した美術商の林忠正をご紹介します（<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100229939.pdf>）。今回は、忠正と交流のあったジャポニザン（日本美術愛好家）についてお話しします。

当時、ジャポニザンと呼ばれた人々は、忠正の店や美術商のサミュエル・ビング（1838-1905）の店などで、浮世絵を買い求めました。ビングは、1888年から1891年までフランス語、英語、ドイツ語の3か国語で書かれた「芸術の日本」(Le Japon artistique) という美術月刊誌を発売して、日本文化を紹介しました。後にビングは店を改装して「アール・ヌーヴォーの店」(Maison de l' Art Nouveau) と名付け、そこからアール・ヌーヴォーという新しい芸術様式が生まれました。



Bibliothèque nationale de France
フランス国立図書館

忠正の店に通い、特に忠正と関係が深った文化人の一人に、ゴンクール賞（フランスで権威のある文学賞）で有名なエドモン・ド・ゴンクール（1822-1896）がいます。兄エドモンと弟ジュールは、共同で作品を発表していましたが、弟のジュールが亡くなり、兄のエドモンは悲しみを癒すために日本美術に没頭しました。エドモンは、忠正の全面的な協力によって「歌麿」(OUTAMARO) (1891年) と「北斎」(HOKUSAI) (1896年) を出版し、浮世絵研究家として名を残しました。そして、これらの著作のおかげで、浮世絵の魅力が広くフランスで知られることになりました。

「歌麿」の中で、ゴンクールは、「私が翻訳した（歌麿作「画本虫撰」に歌麿の師である鳥山石燕が寄稿した）前書きや（林忠正がゴンクールのために訳した十返舎一九著で喜多川歌麿絵の）「青楼絵本年中行事」の十返舎一九による文を翻訳できたのは、親切な林忠正の知性と博識のおかげである。現在の全てのジャポニザンは、自分の研究に必要とする資料は全面的に彼に頼っていると声を大にして言わなければならない。」と忠正に対する謝辞を述べています。

パリの日本大使館員が見つけたフランスの中の日本

ゴンクール「歌麿」は、野口米次郎（ヨネ・ノグチ、1875-1947。詩人、浮世絵研究家。彫刻家イサム・ノグチ（1904-1988）の父）によって翻訳され、1939年（昭和4年）に「ゴンクウル『歌麿』」として出版されました。忠正がゴンクールの浮世絵研究に協力したことで、フランスに浮世絵の知識を広め、その研究書によって日本における浮世絵研究も発展しました。



ゴンクウル（野口米次郎訳註）『歌麿』（国立国会図書館）
"Outamaro par Goncourt" traduit et commenté par NOGUCHI Yone
National Diet Library, Japan

ちなみに、ゴンクールが「歌麿」や「北斎」の中で、富士山（Fuji-san, mont Fuji）を「Fuzi-yama」や「Fouzi-yama」と翻訳したことから、富士山は現在でも使われることがある「Fouji-yama」と呼ばれるようになりました。

忠正は、日本美術コレクターで、ジャポニスム運動の中心にあった雑誌「ガゼット・デ・ボザール」（Gazette des beaux-arts）の編集長だったルイ・ゴンスが出版した「日本美術」（L' Art Japonais）全2冊（初版1883年）の編集を手伝いました。これは、フランス語で出版された初めての日本美術の研究書です。忠正は、「ジャポニスム」という言葉を最初に使った美術評論家のフィリップ・ビュルティの研究活動にも協力しました。インターネットがなかった時代に忠正が提供した情報は、ジャポニズンたちにとって、とても貴重なものでした。忠正の努力のおかげで、ジャポニズムが一過性のブームに終わらず、フランスにおける日本文化の正しい理解につながったと言えるでしょう。